

タバコ作における被覆肥料の検討

鶴田 繁・竹崎紀美子(日本専売公社鹿児島たばこ試験場)

Shigeru TSURUDA and Kimiko TAKEZAKI : Effects of the Fertilization of Coated Fertilizer on Tobacco Plants

最近のタバコは被覆栽培のため、肥料の分解、吸収が早い時期に片寄ってきており、そのうえ、基盤整備や連作等で地力窒素が低下してきているため、成熟期に葉の活性低下や充実不足が生じ、品質的にも喫味的にも問題となってきた。そこで、これらの対策として基本的には地力の増強を図ることが大切であるが、当面の是正策の1つに、肥効を調節することによって肥料の吸収ピークを後へずらす方法が考えられる。ここでは、被覆肥料を利用して、養分吸収経過を調節し、葉たばこの収量品質に及ぼす影響を検討したので、その概要を報告する。

1. 試験方法

本試験は1983年に当場のシラス土壌圃地で、第1表に示した方法で実施した。

第1表 試験方法

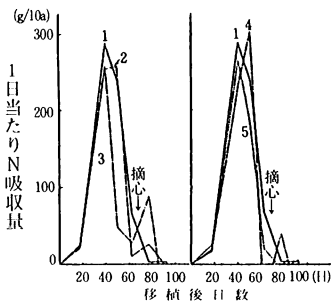
区分	処 理		施肥量(kg/10a)		
	肥 料 名	割 合	N	P ₂ O ₅	K ₂ O
1	有機化成: Long 100	10:0	10	20	26
2	" : "	7:3	"	"	"
3	" : "	5:5	"	"	"
4	" : LP70	"	"	"	"
5	" : LP50	"	"	"	"

注) 堆肥1350kg/10a, 各区共通

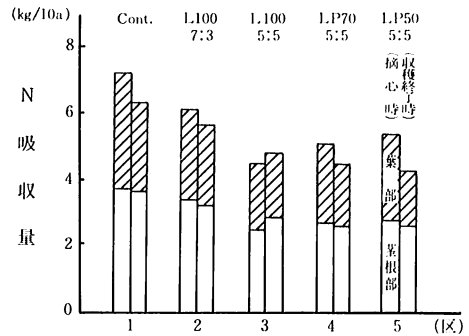
Longは磷硝安加里を、LPコートは尿素をコーティングしたもので、いずれも温度のみに反応して溶出するものとされ、それぞれ日平均温度を25℃として80%溶出する日数で表示されている。供試品種は第1黄色種C319を用い、栽植本数は1932本/10aで、2月16日に施肥、3月16日に移植し、全期間ポリマルチ方式で栽培した。

2. 結果および考察

タバコ耕作期間中の施肥位置における日平均地温積算値を25℃で除算すると、摘心(移植後65日目)までで54日分、83日目で70日分、収穫終了時(113日目)で100日分に相当していた。



第1図 タバコのN吸収経過



第2図 タバコの成熟期におけるN吸収量

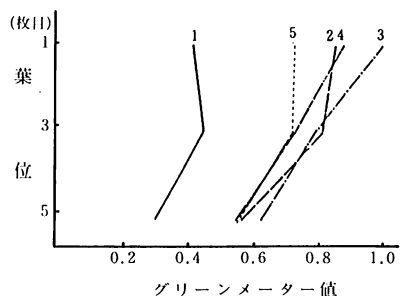
タバコのN吸収経過は被覆肥料の配合割合が多くなるほど、溶出の遅いタイプほど摘心後の吸収が大きく、2段吸収もみられた(第1図)。

摘心時および収穫終了時におけるタバコのN吸収量は被覆肥料の配合割合が多くなるほど少なくなっていた。また、溶出の遅いタイプほど摘心時のN吸収量は少なくなっていたが、収穫終了時のN吸収量は多くなっていた(第2図)。

移植後105日目における摘心位置から1, 3, 5枚目の葉色は、被覆肥料配合区が1区(慣行)に比べわめて緑色が濃く、1区は他の被覆肥料配合区より1週間早く移植後105日目で収穫を完了した。また、最上位葉においては被覆肥料の配合割合が多くなるほど、溶出の遅いタイプほど緑色が濃く肥効の持続が伺われた(第3図)。

被覆肥料配合区の収量は1区に比べやや減少したが、kg当金は高い傾向にあった。

乾燥葉たばこの葉長、葉幅は被覆肥料配合区が1区に比べやや小さい傾向にあったが、1枚重、単面重は1区より明らかに大きく、小柄ではあるが充実した葉たばことなっていた。また、香喫味はLong100の3割配合区で最もよい結果を得た。



第3図 タバコの収穫期における葉色(移植後105日目)